

令和元年6月25日現在

機関番号：34503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03101

研究課題名(和文) 敦煌文献の真贋問題に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A basic study about the "fake" Dunhuang manuscripts

研究代表者

山口 正晃 (YAMAGUCHI, Masateru)

大手前大学・総合文化学部・准教授

研究者番号：60747947

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、敦煌文献がもつ学术研究上の潜在力に対して大きな制約を加えている「贋作」の問題に対して、その真贋を見極める一つの方法として、初期流出品が市場に流通した経緯・事情に焦点を当てて、具体的な事例を蓄積するための作業を行った。当初予定していた、羅振玉の旧蔵書に関してはほとんど新たな知見は得られなかった。しかし、初期流出品としては羅氏旧蔵書より一般的に知名度が高いため、李盛鐸の旧蔵コレクションについて、幾ばくかの成果を得た。李盛鐸の収蔵印には偽印があるが、この偽印を使用していた人物(集団?)は、贋作・真作ともにこの偽印を捺して市場に流通させていたらしい、ということである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

贋作の存在は、学術・研究の信頼性を根底から揺るがす極めて深刻な問題である。本研究で明らかにしたことは真贋問題という巨大な氷山におけるほんの一角にすぎない。しかし、ほんのわずかであっても、これは前進の半歩、一歩である。具体的には、李盛鐸の収蔵印を押印した敦煌文献が数点、ある時期に「まとまった」形で市場に流通した痕跡を見出だした。つまり、この「まとまり」は同一人物(集団)により作製・捺印されたと思われる。重要なのは、この中には贋作に偽印を捺した例もあれば、真作に偽印を捺した例もある、ということである。こうした具体的な事例を積み上げることによって、今後より一層真贋問題の真相に迫ることができるであろう。

研究成果の概要(英文)：This study aims to solve the problem of "fake" on Dunhuang manuscripts, that have been constrained the academic potential of Dunhuang manuscripts. Its concrete method is as follows: focus on the manuscripts that leaked to the private market early, and find connected fragments from multiple collections, analyze the circumstances of them. As a result, we found a group of manuscripts those are called the originally Li sheng-duo's collection, but in fact, those aren't his collection, someone (or group?) forged his private seal, and pressed it on fake and true both Dunhuang manuscripts.

研究分野：東洋史、中国史

キーワード：敦煌文献 真贋問題 李盛鐸 収蔵印

1. 研究開始当初の背景

周知の通り、敦煌文献はその発見時の特殊な経緯・状況により世界各地に分散収蔵されている。中には、民間に流出して骨董品市場に出回っているものも少なくない。こうした状況の中で「贋作」の存在は夙に認識されており、それは敦煌文献を使用する研究の有効性・信頼性を根底から脅かすものであるため、いわゆる「真贋問題」は学界において深刻な問題として早くから共有されている。

そしてそれは特に、情報公開が各段に進行しつつある近年において、より一層深刻さを増している。すなわち、早期にマイクロフィルムや写真が公開され、研究で利用されていたものはイギリスのスタインコレクション（第二次探検収集品）やフランスのペリオコレクション、また中国国家図書館（旧北京図書館）コレクションのうち千字文番号分などであるが、ここに贋作が紛れ込んでいる可能性は極めて低い。これに対して、90年代以降に図版や目録が出版されるなど情報公開が始まった、いわゆる「中小コレクション」とも総称される各地の大小さまざまなコレクションには、少なからざる贋作が紛れ込んでいると見られている。しかもこれらの情報公開は2000年代に入ってさらに加速し、今や公的機関が所蔵する主要なコレクションはほぼ全てが公開されていると言ってよく、個人所蔵分についてすら公開されているものも増えつつある状況下にある。これはすなわち、研究者が贋作を目にする機会が各段に増えたことを意味する。

ここで問題なのは、他の多くの真贋問題と同じく、敦煌文献もまた真贋の見極めが非常に難しいという点にある。有名な話として、敦煌学の世界的な第一人者といってよい藤枝晃が、かつて日本国内に所蔵されている敦煌文献の90パーセント以上は贋作であると発言したが、おそらくこの意見をそのまま受け入れる研究者はいま現在、かなり少ないものと思われる。事程左様に真贋判定は困難を極める。したがって、この真贋問題は敦煌学の健全な発展を阻害する大きな障壁ともいえるべく、これを取り除くことは学界全体にとって避けては通れない課題といえるだろう。

2. 研究の目的

本研究は、敦煌文献を扱う研究者にとって悩みの種であり続けてきた「真贋問題」を解決するための一つのアプローチである。多くの出土文物資料がそうであるように、敦煌文献にもいわゆる「贋作」が存在すること、それと同時にこの真贋判定が容易でないことは、上述のとおりである。この問題を放置できないのは自明であるものの、かといって一挙に解決できるような問題でもない。着実に、真贋判定の実例を一つずつ蓄積してゆくしかない。本研究は、こうした問題意識に基づきその「実例」を着実に積み上げることを目的とする。

そもそも真贋を判定するための方程式などというものはなく、一つ一つの写本をそのつど個別に分析してゆかなければならない。ただし、その際に研究の蓄積が増えてゆけば、当然参照できる情報が増える。たとえば、敦煌文献の贋作を作っていた兄弟の存在がすでに明らかにされているが、彼らの筆跡や、贋作を作成する手法といった情報が多く集まれば、それは次の判定に役立つであろう。つまり、真贋判定の実例が増えてゆけば、それは新たに真贋を判定するうえで一定の参照価値を有するデータベースとなる。真贋を判定する方程式はないものの、贋作と見なしうる事例を多く集めて集約すれば、そこから何がしかの「パターン」といったようなものを導き出すこともできる可能性がある。このように、真贋判定の実例を積み上げることにより、こうした「パターン」の存在を明確にすることもまた、本研究の一つの目的となる。

以上の研究目的から敷衍して、さらに次のようなことも言えるだろう。つまり、「真作＝価値のあるもの」「贋作＝価値のないもの」という単純な図式そのものも見直す必要がある、ということである。贋作には確かに骨董的価値はないかも知れないが、真贋判定のうえで極めて貴重なデータを提供するという意味において、それは重要な学術価値を有している。ほぼ間違いなく贋作と断定できれば、それは贋作のパターンを見極めるうえで、極めて貴重なサンプルたりうる。その意味において、こうしたサンプルは一つでも多いに越したことはない。本研究には、こうした意図も含まれている。

3. 研究の方法

本研究は研究代表者が単独で行うものである。その方法論をひとくちで説明すれば、互いに接合する写本を検索し、その所蔵されているコレクションの性格を踏まえて真贋の可能性を限定してゆく。同時に、その写本がいつ、どこから来たのか、「来歴」を可能な限り遡ることにより、真贋判定の確度を上げる、というものである。これは、甚だ手間と時間のかかる手法である。当初は、羅振玉旧蔵コレクションを手掛かりとして作業を進める予定であったが、実際に作業を進めていく中で、調査対象を限定するのは非効率的であるという結論に至った。したがって実際には羅振玉旧蔵コレクションを意識しつつも、それにこだわることなく広く、各コレクションを横断して、接合するものを探していった。

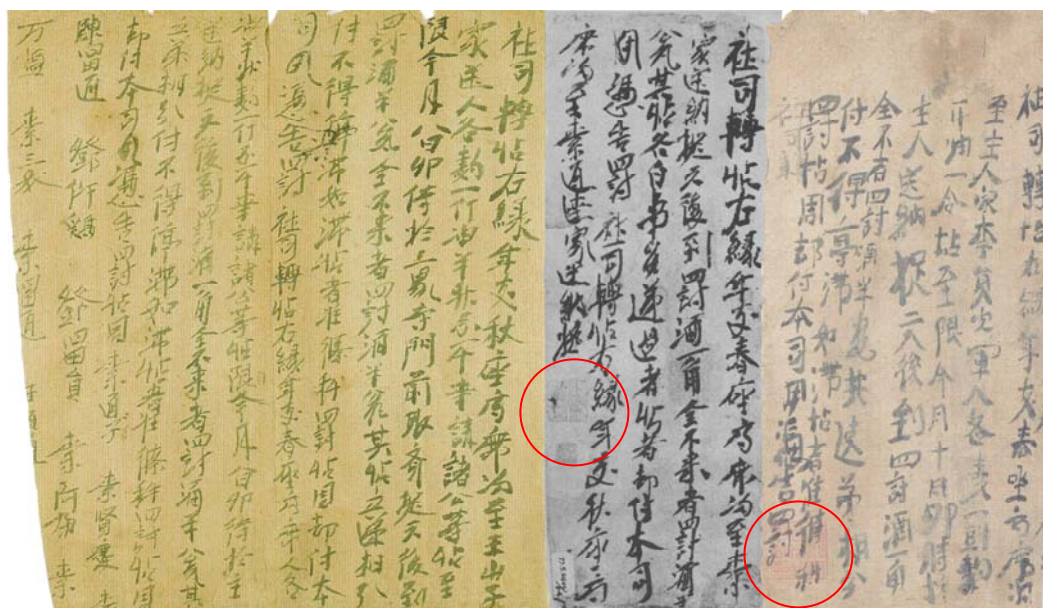
そうした中で現実問題として、真贋判定の必要性を痛感させられたのは、李盛鐸旧蔵書、厳密に言えば、「李盛鐸旧蔵書とされているモノ」である。1910年に清朝政府が王道士のもとに

残っていた敦煌文献を差し押さえて北京に移送した際、李盛鐸が娘婿の何彦昇らと結託してその中の優品を抜き取って自らの懐に入れたのは当時においてすでに知られており、したがって「李盛鐸コレクション」といえば個人としては質・量ともに天下に冠たるコレクションとして有名であった。そうした状況において、贋作を製造・販売するものが「李盛鐸旧蔵書」を騙るのは、当然の流れともいえよう。素性のさだかでないモノはどうしても胡散臭い目で見られがちなところに、天下に著名な李盛鐸旧蔵書となれば、「箔」がついて高値での取引が期待できるからである。さらに贋作の製造・販売者にとって都合がよかったのは、李盛鐸が1937年に死去した後にその敦煌コレクションが売りに出されたこと、かつその収蔵印までもが流出したことであった。こうして、1940年前後より、骨董品・古書市場には「李盛鐸旧蔵」を称する敦煌文献がしばしば出回るようになり、結果として、現在「贋作」の可能性を指摘される敦煌文献には李盛鐸の収蔵印が捺されているものが少なくない。

そうして、李盛鐸の収蔵印を手がかりとして調査を進めてゆくと、逆に今度は、李盛鐸収蔵印の「偽印」という問題に突き当たる。これは早くから藤枝晃によって指摘されていた問題でもある。藤枝は、偽印の捺されたものは当然、贋作であるという立場を表明しているが、実際には真作と考えられるものに、李盛鐸の偽印が捺されているものも既にいくつか報告されている。したがって、最終的には写本そのものの真贋判定と、李盛鐸収蔵印の真贋問題とを連動させて考察する必要が生じる。最終的には、このような観点から本研究を実施した。

4. 研究成果

(1) 日本の武田科学振興財団・杏雨書屋が所蔵する敦煌コレクション「敦煌秘笈」は、李盛鐸旧蔵書を一括して所蔵するものとして学界の注目を集めている。それは羽1～羽432の写本番号を付された部分であるが、本研究で注目するのはここではなく、「李盛鐸旧蔵」を称するモノである。ここに、羽684と羽752という両種の写本があり、ともに一面が「大乘無量壽経」という仏典で、その背面が「社司転帖」という社文書である。この2片は、天津博物館所蔵の津藝61Dという番号を附せられる写本を間に挟んで、接続する。そして注目すべきは、羽752の「社司転帖」の面の左下端には「徳化李氏凡將閣珍藏」という李盛鐸の収蔵印が、津藝61Dの「社司転帖」の面の左下端にもまた、「木齋審定」という李盛鐸収蔵印が捺されていることである。(下図参照、収蔵印は赤丸で囲った箇所)



(写真左から順に羽684+津藝61D+羽752)

写真を見れば明らかなように、この写本が切断されて押印されたのは現代のことである。すなわち、各写本ともに「社司転帖」というタイトルを先頭行として、次の「社司転帖」の直前で切断されており、できるだけ一まとまりの内容を途中で切断しないよう、高い値がつくように配慮した跡が窺われる。と同時に、李盛鐸の収蔵印は切断した後に、それぞれの写本末尾に捺されている。現代人が切断して押印した様子がよく分かる。

天津博物館所蔵の津藝61Dは、「津藝61」という親番号のもとにアルファベットでA～Hの子番号が附されている、その中の一片である(次頁一覧表参照)。これら8点の写本はすべて、周叔駿(しゅう・しゅくとう)の旧蔵品である。天津博物館には総計300点を越える敦煌文献が所蔵されるが、そのほとんどは周叔駿が寄贈したものである。その中で、このようにアルファベットの子番号が附せられているのはこの「津藝61」だけである。この点について天津博物館の担当職員に確認したところ、周叔駿が寄贈した段階でこれら8点の写本のみ、一つの袋にまとめて保管されていたからだという。つまり、周叔駿がこれら8点を一括して入手したもの

と想定される。そうして見たときに注目されるのが、これら 8 点には全て李盛鐸の収蔵印が捺されていること、また 8 点（正背 12 面）のうち実に 6 面について贋作との評価が、天津博物館の調査により既に下されていることである。これは、同一の贋作製造者（グループの可能性もある）がまとめて売りに出したものを、敦煌写本の蒐集に情熱を傾けていた周叔駉が一括して購入したことを示唆する。そうして見た場合、写本そのものについては贋作と同時に真作も含まれていることが注目される。そうして、真作にも李盛鐸の収蔵印が捺されていることが分かる。この贋作製造者は、単に贋作を製造するだけでなく、真作をもどこからか入手して、そこに李盛鐸の収蔵印を捺して売っていたことが分かる。その目的は当然、値をつり上げるためである。

津藝 61A	維摩詰諸説經弟子品第三		
津藝 61AV	世祖偈子詩	「徳化李氏凡將閣珍藏」「周暹」	偽
津藝 61B	汴州司馬朱状	「徳化李氏凡將閣珍藏」「周暹」	偽
津藝 61C	書札	「木齋審定」「周暹」	偽
津藝 61D	無量壽宗要經		
津藝 61DV	社司轉帖	「木齋審定」「周暹」	
津藝 61E	諸星母陀羅尼經		
津藝 61EV	信札	「徳化李氏凡將閣珍藏」「周暹」	
津藝 61F	維摩詰諸説經弟子品第三		
津藝 61FV	壬午年蘇永進雇駝契	「徳化李氏凡將閣珍藏」「周暹」	偽
津藝 61G	五言絶句詩	「徳化李氏凡將閣珍藏」「周暹」	偽
津藝 61H	文稿	「徳化李氏凡將閣珍藏」「周暹」	偽

（天津博物館所蔵「津藝 61」写本一覧）

そうして、上述の羽 684・羽 752 および津藝 61A～H の各写本について実地調査を行った結果、これらの収蔵印は、先行研究によって偽印とされたものに酷似していることを確認した。ただし、それと同時にまた、先行研究ではたとえば「徳化李氏凡將閣珍藏」の偽印は少なくとも 8 種存在すると指摘されているが、この見解の有効性にも疑わしい点の存することを確認した。

こうした写本および収蔵印の眞贋問題というのは非常に微妙な問題であり、断定することは相当に難しい。眞贋の「判定」という部分に関しては、どうしても「断定」を避ける風潮がある。決定的な証拠がない限り、それは研究者として必然の姿勢であり、本研究においてもそれは同様であるが、ただしそれではやはり研究の進展において現状を打開するのは難しい。その意味において、本研究で明らかになった事柄は、眞贋判定の事例研究としてこれだけの数量がまとまって流通していた痕跡の窺われる事例は他になく、非常に貴重なサンプルであると評価することは可能だろう。

(2)

上記(1)の研究成果とは別に、本研究を実施する中で、いわば「副産物」として得られた成果がある。それは、研究代表者本人がこれまで取り組んできた仏名経に関わる成果である。具体的には、各コレクションを横断的に調査している中で、「(現在) 十方千五百仏名(経)」という、歴代の各経典目録や木版大蔵経には一切著録されていない仏名経が、敦煌・トルファンだけでなく、奈良時代の日本にも存在していた痕跡を見出したということである（日本には現物は残っていない）。この点を軸として、従来研究者から等閑視されてきた仏名経について、その流布状況を分析することによって存在意義（現実問題として、敦煌・トルファン写本には大量の仏名経が含まれている）を論じたのが、「主な発表論文」の「雑誌論文」の①である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

① 山口正晃「中国仏教」の確立と仏名経」、『関西大学東西学術研究所紀要』51 輯、2018 年 4 月、pp.233-259.

〔学会発表〕(計 4 件)

① 山口正晃「仏名経類と三階教の関係について」、佛教史學會学術大会、佛教大学、京都、2018 年 11 月

- ② 山口正晃「杏雨書屋與天津市藝術博物館所藏《大乘無量壽經》寫本札記 一羽 684・羽 752・津藝 61D一」、中国唐史学会第十三届年会暨“唐代中国与世界”国际学术研讨会、浙江大学、杭州、2018年11月
- ③ 山口正晃「所謂“中國佛教”的確立與佛名經」、唐代佛教社會的諸問題國際學術研討會、浙江大学、杭州、2017年3月
- ④ 山口正晃「從佛名經來看東亞佛教圈 一長安・敦煌・奈良一」、 “The Written Legacy of Dunhuang” the International Scholarly Conference devoted to the memory of L.N. Menshikov (1926–2005) and L.I. Chuguevsky (1926–2000)、IOM RAS、St.Petersburg、2016年9月

〔図書〕（計 1 件）

- 氣賀澤保規編『隋唐仏教社会と東アジア』汲古書院、2019年10月（予定）、頁数未定

〔産業財産権〕

- 出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

- 取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。